
IS インフィニットストラトス ~蒼雷の異業騎士と再来の風・黒き雨~
夢を忘れた者

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IS インフィニットストラトラトス ～蒼雷の異業騎士と再来の風・

黒き雨～

【Zコード】

Z3330Z

【作者名】

夢を忘れた者

【あらすじ】

神様（？）のせいで『ISインフィニットストラトラトス』の世界に行く事になつたオリ主。悪しき罪を裁ぐ断罪の剣が今舞い降りる『然るべき報いをツ（アンサラー）』

これは『IS インフィニット・ストラトラトス』と『ナイツ・オブ・

ザ・フリークス』のクロス&オリ主&オリストモノです

クロスモノが苦手な方は を押して下さい

プロローグ（前書き）

パパ聞きの方もある程度書けてきたので、投稿します

では本編スタートです

プロローグ

田が覚めるとそこはポーラーテールの良く似合つ女の子（15～17歳ぐらい）が顔を覗き込んでいた。

「おひ。起きたか？ 肩。起きたんだよな？ じゃあ早く起きやがれ！ 肩、ノロム、不能男・・・」

「ウガー！」

いきなり罵罵雑言を言い放つ女の子に思わず奇声をあげてしまった。

「なに？ 变な顔をして？ 不能男なら不能男らしく・・・」

「もつ口を開くな！ お、俺のお前に対する何かが崩れちまう！ そして、俺は不能男じゃねえ！！！」

その子は見た田は、絶世の美少女なのだが口調が絶望的に悪かった。

「おい、肩。我は神様だ！ そして、お前に少し頼み事あんだけど聞けよ？！ 拒否権はねえからな！」

「それが人にモノを頼む態度か！ ！ ！ そして、拒否権を寄越せ！ ！ ！」

そんな怒鳴り合いが一時間ほど続いた後

「うざーな。はあ。じゃあまあ、我ができる範囲で能力を5つ叶えてやりやー！」

「相も変わらず暴言を吐くな！！ハアー能力か。うーん、『ナイツ・オブ・ザ・フリークス』の蒼雷の逆鱗と聖骸の力があれば問題無いと思つ。・・・んで、なんでそんな事を聞く（汗）」

「決まつてんだろ。イレギュラーのいる別の世界に連れて行く為だ！…まあ、後の3つはいつか叶えてやろつ…」

寝耳に水とはこの事だらう。神様が出て来た時点で何かおかしいと氣付くべきだつた。今更だが世界つて理不尽だなと思つていた。

「アホ吐かすな！！！！じゃあなにか、俺はイレギュラーを倒すために此処に連れて来られたのか？！？」

嫌な空氣だつたが、俺がいる理由をはつきりさせる為に神様（？）に問掛けた。すると、神様（？）は良い笑顔でサムズアップしてきた。俺の中の堪忍袋があっけなく切れ、柄にもなく怒鳴つてしまつた。

「何してくれたんだ…！！！」

「そんなに怒鳴らなくて良いから願い事はもうないの？無いならお前の機体を渡すから！…？」

「ちよつと待てやあ…！！！」

と怒鳴つた瞬間にちからに向かつて何かを投げられた。慌てて受け取るとそれは蒼いチョーカー（？）だった。

「ちゃんと渡したからな？安心しろ…イレギュラーを片付けたら元の世界に帰してやる！…さあ逝つて来い！…！」

「『行つて來い』の間違えだよね？！そりだよね？……って、田を反らすな…………！」

神様（？）は何か思い出したかの様にこくりを向きた爆弾を投げた。

「そりだう。逝くのは『エスインフィニットストラトス』の世界だから。じゃ、逝つてらっしゃい～～～」

ムカつく声で言われた途端足下に直径2mの穴が開き、そこになすなべなく俺は落ちていった。

side 神様（？）

誰もいない空間で彼女は一人呟く。

「落ちた先に待ち受けの運命に期待と不安を抱え彼は何を成すのか。何を失い何を得るのか。本当に楽しみだ。イレギュラーの事もあるが彼が選ぶ未来に幸あれ。」

言い終わるとその場を離れ始めた。
そしてその場には誰も居なくなつた。

side 神様（？） out

プロローグ（後書き）

「意見」「感想お待ちしております

1話 大罪の獣～マスター・テリオン～（前書き）

戦闘前までになります

では本文スタートです

1話 大罪の獣～マスター・テリオン～

学年別トーナメント

第一試合

織斑一夏＆シャルロット・デュノア VS ラウラ・ボーデビッヒ＆篠ノ野幕

試合の終盤戦に差し掛かり、ラウラがシャルの盾殺し（シールドピアース）で吹き飛ばされ壁にぶつかった直後事態は一変した。

side 一夏

シャルのシールドスピアが決まり俺達の勝利が確定しようとした時、ラウラの機体がいきなり放電し始めた。
機体の装甲がドロドロに溶け、それがラウラを包み一振りの刀を持つた人物の姿になった。

その姿を見た瞬間俺の頭は怒りで真っ白になった。

side 織斑一夏 out

side シャルロット・デュノア

いきなり放電し始めたラウラにも驚いたが、その後に形体変化（？）

が起こつた。その姿は例えるなら世界最強の武士。その姿を見た一夏は怒りの声を上げながら生身で戦おうとしていた。けれど幕さんに止められ、諭されたが彼の信条は揺るがず、ただエネルギーが無いのを悔やんでいた。

「『エネルギーがないなら別のところから持つてくればいい』ってことだよね」

僕は一夏に確認をとり、すぐに実行した。

side シャルロット・デュノア out

side 篠ノ野幕

私には一夏と共に戦う力が無い。今は無力を嘆く暇はない。分かっている。だからこれだけは言いたい。

「死ぬな・・・・・・・・。絶対に死ぬな！」

「何を心配してんだよ、ただ俺を信じて待つていてくれ。必ず勝つて帰つてくる」

私の必死の叫びに答え戦場へ向かう彼の背中に向け約束を交わす。

「か、勝つてこい一夏！」

「ああ！行つてくる」

side 篠ノ野幕 out

side ???

「あそこから反応がある」

学園の外周からアリーナの方を向き咳く男がいた。

ロングコート

男は、夏を間近に控えたこの時期に不釣り合いな蒼白の長外套を着て、長髪の黒髪が風で揺れると、その奥からは蒼い目が見えた。彼が、双眼鏡を使わずに三km離れたアリーナの様子をみているなんて、誰も分からなかつた。

彼はふと目線を反らし裏路地に入つて行つた。

人の目がくなつた瞬間、その路地から蒼い稻妻がアリーナの方に飛んで行つた。

side ??? out

side 織斑一夏

俺は今混乱の中にいる。

俺が一閃一断を使いラウラを包んでいた黒いISを撃破しカタパルトデッキに向かおうとした時アリーナのバリアを破り何か黒いモノがアリーナ中央に落ちた。何事かと思いそちらを見ると、そこには体が半分程が黒くなつており、周囲に釘や杭などを浮かべ立つっていた(・・・・)。

浮いている釘や杭などはISの装備と思えばまだ受け入れられる。

だが、生身の人間がアリーナのバリアを破つたり、高高度からスライディングで落ちてきたにしてもパラシュートとも無しに地面に着地出来る筈もない。

そんな事を思考していると落ちてきた女の子は、いきなり釘や杭を射つてきた。

交わせないタイミングで発射された必殺の一撃は俺やシャルロット、ラウラに直撃コースで迫つてきた。

『俺は、まだ誰一人として守れていないまま死ぬのか』 そんな考えが頭を横切つた瞬間、辺り一面が真っ白に染まり雷が落ちた様な轟音が響き渡つた。

轟音が收まりあの後どうなつたのか気になり急いで目を開けるとそこには一人の騎士がいた。

その姿は、全身をくまなく覆つている蒼銀の装甲。それは甲殻と言うには金属的で、甲冑と言うには生物的過ぎた。異形と呼ぶには洗練されており、騎士と呼ぶには禍々しい。

銀の鬚を海風になびかせ、天を突く三本の雷角を備えた鬼神を象る全面兜。四肢を、胴を仰々しくも力強く鎧う紫電帶びる甲殻。肩と肘には爪とも角とも見える大小の尖塔が伸び、背面に垂れ伸びる七本の尾はそれが鋭利に煌めく蛇腹剣の如く。肩元から垂れた無数の肩巾。首に巻かれた長大な一重の帶布は、蒼白の四翼が猛り羽撃く（はばたく）かのように、帶電しながら海風になびく。

右の手甲に刻まれているのは、対の曲刃を象つた装飾。それがひときわまばゆい電光に煌めいた瞬間、無数の肩巾と垂れた七尾が衣状に連なり、さながら蒼銀の騎士外套となつて翻る。

その騎士（？）は落ちてきた女の子に向けて話だした。

「我が名は『神罰』…………貴様は大罪嫉妬罪銘絶夢だな。…………

・・・・・墮ちた者は元には戻らぬ…………だからこの場で断罪する！………… 然るべき報いを（アンサラー）」

そう言ってその人は女の子に向かって行つた。

side 織斑一夏 out

1話 大罪の獣～マスター・テリオン～（後書き）

「意見」ご感想お待ちしております

ではまた次回

2話 蒼雷の異形騎士～ナイト・フロークス～（前編）

なんか出来ちゃったので投稿します

やればドヤるんだなあとしみじみ想いしつた

では本文スタートです

2話 蒼雷の異形騎士ナイト・フリークス

side 織斑千冬

学年別トーナメントの途中で現れたアリーナのバリアを破壊して高度から落ちて来た女。人体構造上ありえない着地を見てしまい、一瞬だが唖然としてしまった。

その一瞬の隙に女は一夏達に向け攻撃を仕掛けた。女の攻撃が当たると思った直後蒼いイナズマが降り注ぎ、攻撃の全て叩き落とした。

蒼いイナズマは土煙が上がるアリーナに徐々に姿を表した。その姿は、全身をくまなく覆っている蒼銀の装甲。

それは甲殻と言つには金属的で、甲冑と言つには生物的過ぎた。異形と呼ぶには洗練されており、騎士と呼ぶには禍々しい。^{銀の鱗}を海風になびかせ、天を突く三本の雷角を備えた鬼神を象る^{フルフェイス}全面兜。四肢を、胴を仰々しくも力強く鎧う紫電^{せんじ}帶びる甲殻。肩と肘には爪とも角とも見える大小の尖塔^{せんとう}が伸び、背面に垂れ伸びる七本の尾はそれが鋭利に煌めく蛇腹^{じやぱく}剣の如く。肩元から垂れた無数の肩巾^{ひれ}。首に巻かれた長大な二重の帯布^{マフラー}は、蒼白の四翼^{シキ}が猛り羽撃く（はばたく）かのように、帶電しながら海風になびく。

右の手甲に刻まれているのは、対の曲刃を象った装飾。それがひときわまばゆい電光に煌めいた瞬間、無数の肩巾と垂れた七尾が衣状に連なり、さながら蒼銀の騎士外套となつて翻る。

そこには異形という形の騎士がいた。騎士は女に對峙し話だした。

「我が名は『^{ペインキラー}神罰』……貴様は大罪嫉妬罪銘絶夢だな。」

・・・・・墮ちた者は元には戻らぬ・・・・・だからこの場で断罪する……・ 然るべき報いを（アンサラー）」

そう叫ぶとその騎士は女に向かつて行つた。

side 織斑千冬 out

side シャルロット・デュノア

落ちて来た女に攻撃されると思った瞬間、雷が落ちた様な轟音が響き視界を真っ白にした。視界が回復すると目の前に蒼雷の異形騎士ナイト・フレークスがいた。

『人が人でなくなる時、蒼雷の騎士が来る』

あの噂は本当だつたんだ。

人が人でなくなるとはどういう事がわからなかつた。だが、今日の前に蒼雷の騎士がいる。ならば、あの女の子は『人でなくなつた』ということになる。

けど見た目は変わらない。変わつていなが不自然に笑みを浮かべ

釘や杭を空中に浮かべている。

普通はあり得ない光景、けれど今日の前で起つる光景。

その光景に睡然としながらただ現れた騎士を視界の端で見ていた。

side シャルロット・デュノア out

side 異形騎士

業魔に堕ちた女に向かつて走る。だが、本来の力を使つていなかった相手に迎撃される。

「チツ！…」

初撃で相手を仕留められなかつた事が今更ながら悔やまれる。

普通は聖骸を消費するのだが神様（？）の粋な計らいか体力を消費するようになつていて。これで業魔化する危険性は減つたが戦つた後、急激に空腹になるのは悩みの種だ。

そんな風に思考を巡らせていると、女から攻撃してきた。それを紙一重で避けつつ直撃のモノを雷撃を使い迎撃する。

いい加減空腹も限界に近いため左手から雷撃を生み出しそれを右手で掴み取る。蒼銀の籠手で握ると雷光は一瞬で収束し、硬質な刃の姿を象つた。

蒼い雷光によつて編み上げられたその剣刃を女に向かつて投げる。投擲した雷剣は、雷撃本来の特性のままに、一瞬で女に当たつた。雷剣で痺れているであろう女に向けて数十本の雷剣を投げると、相手の女は逃げる様な素振りを見せた。しかし体が痺れているため、思つように動かない。聖骸を全身に籠めると自身を雷に変え、相手の目の前に移動する（・・・・・・・・）と前もつて溜めていた聖骸を腕に籠め『雷拳』を使い相手を打ち抜く。女は打ち抜かれた事で鱗割れ始め、崩れていった。

黒い灰にも似た残骸が風に吹かれて消えた。後には、淡く輝く罪の結晶 聖骸だけが残される。

それを喉元にある逆鱗で吸収し、ここからどうやつて帰ろうか思案しているとオレンジ色の鎧（？）を纏つた少女が話掛けてきた。

「・・・・・あなたが蒼雷の騎士なんですか！？」

帰る事が最優先になつていて今の俺は軽く頷くと、その後に話し掛けられた事に気付かず、周囲を囲まれる前に自身を雷に変え学園の

外へ逃げ出した。

side 異形騎士 out

side 織斑千冬

落ちて来た女を『大罪嫉妬罪銘絶夢』ケースハンドバー コードバイザーダストと呼んだ蒼銀の騎士は、攻撃を仕掛け始めた時から私と山田先生は、騎士と落ちて来た女のデータを記録し始めた。ISではなく生身の人間がISと同等かそれ以上の力を検出した時唖然としてしまった。その時あり得ない光景が目の前に現れる。

いくらISを改造したとしてもこれはあり得ない。
その光景を見たとき知らず知らず呟いていた。

「体を電気化しそして標的の前で再度物質化するだと…？」

それは現存するISいや、あの束でも開発出来ない事だった。確かに武器を粒子化し収納はできるが、自身の体を粒子化いや、電気化しそれを移動の手段に使つたり、雷撃を収束させ剣を作るなど出来るはずがない。だが、目の前に存在するあの騎士はそれを簡単にやつてしまつた。それに恐怖の念が込められているのか、騎士の噂は聞いた事がある。曰く『血も涙も無い怪物』、『人を殺す悪魔』、『罪人を裁く断罪者』。

騎士の事を調べようにも手掛りが無い。『現れ事が終われば消え去る』

だからか付けられたあだ名は『亡靈の異形騎士』ファンタム・ナイツ・フォーカス

「あ、あの織斑先生。……デュノア君が騎士に話しがけよ

「うどしてこます。」

「なにつ……」

「デュノアの行動に驚きはしたが、敵か味方かを見極めるいい機会だつたのでそのまま、様子を見ることになった。だが、少しだけ話したかと思えば再び自身を雷に変え学園の外へ逃げ出してしまった。

side 織斑千冬 out

2話 蒼雷の異形騎士ナイト・フリークス（後書き）

敵に関してですが、強欲と暴虐と傲慢の罪名で何か良いのがあれば教えて下さい（＜人＞）

例

大罪 傲慢 プライド
罪名 唯我 リベリオン

てな感じでお願いします
(＜人＞)

ご意見、ご感想、ご指摘等もお待ちしております。

3話 行き倒れの駅と駅の娘ー? (前書き)

シャルロッテとの出会いへままで

なんか書いてたら最長になっちゃいました

() バテッ

では本文スタートです

3話 行き倒れの男と男の娘！？

side ???

バイツアダスター
絶夢との戦いが終わりその場から離脱して、学園の外周部にたどり着くと空腹でめまいを起こし、倒れて意識を失った。

side ??? out

side シャルロット・デュノア

僕はあの異形騎士ナイト・フリースが向かつた方向に走っている。あの後アリーナで起こった事は箇口令が敷かれ、出撃していた僕と、一夏、篠ノ野竜さんは別で事情聴取を受けた。

僕はそんな事よりもあの騎士を追い掛けたかった。

あの時、僕の母さんをその手で殺した時、あなたは何を思い僕を助けてくれたんですか・・・あなたは何処にいるんですか

教えてよ『蒼夜』

side シャルロット・デュノア out

side 蒼夜

意識を失っている間に誰かが俺を医療施設のある場所まで連れて行ってくれたみたいだ。辺りを見回してみるとその部屋は学校の保健室のようだった。

持ち物を確認したが無くしている物がなかつたので、ボーとしていると部屋の扉が開き黒いスースに身を包んだ目付きの悪い女性が入つて來た。

「起きていたか・・・貴様今の状況は理解しているか?」

「・・・いえ、全く分かりません・・・できれば説明して欲しいのですが」

どうしてこの様な状況になつたのか皆日検討がつかなかつた。

side 蒼夜 out

side 織斑千冬

今日の前にいる男は、学園の外周で倒れていた所を巡回中だった教員チームが見つけ連れて來たのだ。

「・・・端的に言えば、お前はこの学園の外周部で倒れていたのを発見され、ここに連れて來たのだ。・・・まあ、簡単に言つてしまえばそんな感じか・・・では本題だ。何故あの場所で倒れていた!? 答えようで!」「グ〜!」ツ

本題を話している最中にヤツの腹のムシが鳴いた。もう盛大に鳴い

た。聞き逃せない位に鳴いた。

「…………腹が減っているのか？」

少々呆れながら聞いた。

「…………すみません。もつ半月ほどまとも食べて無いもので。…………ほぼ水しか取つてないなんてさすがに言えないとよ」

「声に出でているが」

呆れた事に半月も食べていなかつた様だ。しかしよく水だけで半月も生きて来られたなあと関心している所もあつた。
だがしかしのままでは、ラチがあかないので、

「おこ、今からいの学園の食堂に行くが問題ないか？」

と聞くと顔を輝かして即答した。

「お願ひします。ありがとうございます。」

side 織斑千冬 out

side 織斑一夏

俺とシャルロットは食堂で遅い晩飯を食べていた。

ちょうど海鮮塩ラーメンの麺を食べ終つた時千冬姉が何かを引きずつて食堂に入つて來た。引きずつているモノの正体は遠目であつた

ので分からなかつた。千冬姉は俺達に気付くと『良い生け贋がいたとばかり』に微笑を浮かべ、こちらにやつて來た。

「織斑、デュノア。すまないがこいつの監視を頼む。」

そう言つて引きずつっていたモノを俺達の向かいの席に放り込むと、用は済んだとばかりに出て行つた。千冬姉が引きずつっていたモノを改めて見てみると蒼白の布地の長外套を着た。男だった。・・・・・・
・うん男だ。

「「はあ！――男！――！――！――！」

突然の俺とシャルロットの叫びで食堂にいる皆の視線が集まつた。

「お～い、君。起きた方が良いぞ」

なんて声を掛けるが無反応でテーブルにうつ伏せになつていた。ちょうどその時食堂で働いているおばちゃんが大量の料理を運んで來た。

「あの俺達そんなに頼んでないんですけど」

「織斑先生からの指示でね『そこにいる子に食べさせり』と言われたんだよ」

俺の素朴な疑問に答えてくれたおばちゃんはドンブリを男の前に出した。瞬間ドンブリが消えた。その時男の方からグルルッガルルッという音が聞こえてきた。ふと目を向けると男が、ドンブリ」と食べる様な勢いで食べていた。

「ハハハ、良い食いつぶりだね。気に入つた。たくさん食べな……」

そつまつておばちゃんは笑いながら調理場に戻つて行つた。

・・・・・・・・・数分後、田の前の男はドンブリを10杯、ラーメンを5杯、デザートを5個を食べてた。

ふと見ると、食べ終わり満足そつまつ男にシャルロットが真剣な目で話し掛けていた。

side 織斑一夏 out

side シャルロット

あの騎士に似ている男が目の前にいる。季節外れの蒼白の布地の長外套を着いるその人は、食事が終わると立ち上がり何処かに行こうとしていたので、タイミングをみて話し掛けた。

「ねえ。聞きたい事があるんだけど?」

「ん。何かな?」

「君は『蒼雷の異形騎士』の事を知つてる?」

「うん。まあ、一般常識程度ならだけど。」

普通の会話のように聞こえる。だがその会話を聞いている者にとっては氷点下に居るんじゃないかと錯覚してしまつほど冷えきつていた。

「じゃあ。知ってる事を教えてよ。」

「良いよ。・・・・・そうだなあ。これはあの騎士を見たら分か
る事だが、あれはINSじゃないつてこととあれは現存するどんなI
Sでも倒す実力がある（・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・）
つて事かな。」

「へえ。・・・質問なんだけど」

僕はこの会話の要である質問を聞いた。

「5年前にフランスで起った事件を知ってる?」

「ああ、知っている。あの騎士が始めて世に出た事件だろう。」

その答えを聞き僕は彼があの『蒼雷の騎士』だと確信した。満足げに頷いていると、黙つていた一夏が男に問い合わせてきた。

「なあ。『5年前にフランスで起こつた事件』ってなんの事だ？」

知らないのか!? 目の前にその事件の被害者がいるのに

「僕が話していいだけだよ。・・・・・余りあの時の事を語りたくないから。・・・そうだ！知ってるいるなら一夏に教えてやつてよ。」

自分の事を話すのは苦手だ。 だけど、あの場にいたもう一人の証人として

『蒼雷の異形騎士』(キリ)が話してくれるなり安心できる。

side シャルロット out

3話 行き倒れの男と男の娘！？（後書き）

初めてオリ主の名前を出しました

オリ主の簡単なプロフィールです

氏名 三天 蒼夜

年齢 18歳（転生前 22歳）

特技 武道と食事

今は以上です

ある程度進んだら詳しいプロフィールを作ります

次回はオリリストになります

ご意見、ご感想、ご指摘等お待ちしております

4話 フランス事件へ上り（前書き）

ちよつと戻くなつたうなので、2～3部に分けて更新します

1回は執筆できなかつたので平日にて更新してこあます

では本文スタートです

4話 フランス事件へ

side シャルロット

あの光景を僕は決して忘れないだろう

・・・・・あの断罪者の悲しげな背を、母さんの変貌を、楽しくも儂い夢の様な日々の崩壊を・・・・・・・

side シャルロット out

side 蒼夜

織斑一夏がフランスであった事件を知らなかつたので、俺はシャルロットに許可を取り話し出した。

「・・・・・事件の始まりはある一人の少年が、フランスの山中にある町を訪れた事から始まる。・・・・・」

辺りはシーンと静まり聞きこっていた。

side 蒼夜 out

町外れにある親子が住んでいる。町で一番の美人親子であるが人目を避けるよつに住んでいる事に疑問の声も上がるが、彼女達の意思

で住んでいた。何も言えなかつた。親子の名前はシャルロットとカティアといつ。

ある日、町に男が訪れた。その男は容姿はアジア系で、何故か初夏を迎えるとしている時期に『蒼白の長外套』を纏い、蒼いチヨーカーを身に付けていた。

ドコからか落ちてケガをしているのか、左腕に力が入つていなかつた。

それを見たシャルロットは『大変早く治療しなくちゃ』と思い自宅に招いた。

男はお礼を述べ足早に出て行こうとした。

「待つて下さい！－ちゃんと治療しないと後々困る事になりますよ！？」

必死で説得し左腕が完治するまでという条件で、彼は彼女の家に厄介になることになった。

side シャルロット

あの男の人はどうな生活を送つていたのか、もう治つてゐるが身体中に切傷や銃痕、裂傷、火傷があつた。男の人は『あることをしていたらこうなつた』と言つて詳しくは教えてくれません。

左腕だけかと思われたケガも右の肋骨に鱗が入つてたりして全治二ヶ月と医者に言われた

そんな事に気にする風もなく彼はヒヨウヒヨウとしていた。

・・・・・数日後近くの町で事件があつたらしく軍隊が町の近くまで防衛線を張つていました。

彼は母さんと話す機会が増やしていました。何を話しているのか聞

いてみましたが、『単なる世間話よ』と言つて取り合ひてくれません。

そして彼はしばらく治療に専念しました。・・・・・・彼はキズが完治すると、すぐに町を出て行こうとしました。

その背中にキズ以外の何かを背負つているみたいに見えて、放つて置けなくて、何故か胸のなかがモヤモヤで一杯になつていました。ふと、ある風景が目の前に現れてすぐに消え去つた。

それは満月が綺麗な夜、彼が月に向かつて泣き叫ぶ光景だった。

それを見たからか、歩き出していた彼の目の前に移動し、両手を握つて

「・・・やつぱり行かないで。・・・あなたの背負つているモノは何かは知らない、けどあなたを知つていて。・・・あなたは僕達親子を傷付けない。・・・それにこの胸のモヤモヤが何なのか知りたいから」

そう言つていた。母さんは彼と私を見て一ヶ口リと微笑み私に頷きました。

「あらあら、シャルロットにも春が来たのね」

なんて、からかつてきました。ですが私はそんな気はなかつた。だけど、彼が微笑したのを見てしまい赤面してしまつた。

それを見た母さんがニヤニヤしていました。

「ねえ、あなたの名前を教えてくれないかしら」

母さんが今更ながら問いかけてきた。

「そりいえば私も聞いていなかつたから、教えてよ。」

ケガの事もあつたが、聞く機会が多かつたのに聞けなかつたので、聞こうと耳を傾けていた。

「・・・・・三天蒼夜・・・・・蒼夜つて呼んで」

そう言つと顔を向けてしまつた。どうしたのかと思ったが、耳まで真つ赤にしていた。その姿が可愛いと思つてしまつた。

side シャルロット out

4話 フランス事件へ上り（後書き）

一応、上 シャルロッテ、中または下 カティアと蒼夜の話にするつもりです。

まあ、都合主義な部分もありましたがいかがでしたか

ここまで更新が一日で構成し、執筆してできるなんて自分でも信じられません。

一日頭を休めて今年の後一週間頑張ろうと思います。

では良い週末を

5話 フランス事件～中～（前書き）

更新しました

今回は蒼夜が転生しシャルロット達が住む町に、たどり着くまでと蒼夜が連れて来られたシャルロット達の家の様子になります

シャルロットの母さんの名前はお気に入りのゲーム内から選び出しました。

では本文スタートです

side 蒼夜

俺が転生した場所はフランスの山中だった。一応世界を旅して回っていたので、日常会話や習慣、作法などの違いに嫌悪する事はない。今の現状は崖の近くにある岩にしがみつき崖から落ちないように頑張っている。

「・・・あのバカ神が～！！！」

こんな状態になつたのには理由がある。

あの穴に落ちた時すぐに気を失つた。

気が付くと崖のふちにいた。そのためか立ち上がりろうとした時、足が滑り落ちそうになつたからだ。

現実逃避もここまでか、そろそろ腕が痺れてきた。もう手の感覚もない。

少しでも岩にしがみつきたかったので、体制を入れ換えようとしたが、うつかり手の感覚がないのを忘れて、岩の出っ張りを離してしまつた。掘んでいると思っていた手が滑り、崖の下にまつ逆さまに落ちてしまつた。

数分後、気を失つていたのか目を覚ますと体に痛みを覚えた。

「・・・・・田は見える。風の音も聞こえる。痛みも感じる。地面の感触もある。声も出せる。土と血の匂いを感じる。・・・・・右側の外傷なし・・・・・左側腕が骨折および出血・・・・・左肋骨に痛みなし・・・・・右肋骨に痛みあり、たぶん縛が入つ

てるな。」

そんな風に自分の体を確認していった。そんな冷静な行動が出来るのも聖骸の力のおかげだ。

数時間後痛みがある程度引いたので、岩にしがみついていた時見つけた川を目指して歩きだした。

・・・・・

数時間が過ぎ川の畔にたどり着いた。

しかし、畔の周囲には人の気配はなかった。だが、近くに道があり往来の側に在ることがわかつた。

疲れていたからか少しの休憩の筈が、明け方まで寝てしまっていた。

・・・・・夢を見ている・・・・・あの頃の夢だ・・・・・
アイツとの約束破つてしまつたな・・・また会えたらちゃんと誤まらないと・・・

あの笑顔を見るためにも頑張ろう

目を覚ますと辺りは靄に包まれていた。

体調を確認してみると、左腕と右肋骨以外は良好だった。

俺は道をひたすらに歩き続けた。そして山中にある町にたどり着いた。そこで金髪の少女に出会った。彼女は俺の姿を見て畏れた風もなく、話掛けてきた。

「あの・・・ケガしてるみたいだけど、大丈夫ですか？」

その表情は本当に心配しており、泣きそうになっていた。強引に彼

女が腕を引っ張られ彼女の家に招待された。

side 蒼夜 out

side カティア

娘がケガをした男を連れ込んだ。それは親離れのサインなのは知りませんが、少なくともこの町にいる同じ年の男の子と違う雰囲気で話していますね。子どもの成長に微笑んでいた。その時ふと心の中に何かが過ぎつた。

『ケーズグリード カルマエリュシオン
罪強欲罪名忘鏡』

心の中を過ぎた何かのいみがわかると、これが自分の罪なんだと気が付いた。

side カティア out

side 蒼夜

あの心配してくれた娘は『シャルロット』とその母親は『カティア』と言つらしい。何故らしいという言い方なのかいといえば、まだ自己紹介していないからだ。

だが、彼女達は話し相手が欲しかったのか暇を見つけては話掛けてきたきた。例えば、『今まで何処にいたの?』とか『どんなところを旅したの?』とか『どうやってここまできたの?』とか『娘を嫁にどうかしら?』などだ。・・・カティアさん、シャルロットの許可を得てから婿探しして下さい。シャルロットも目を開いて驚いて

要るじゃないですか。

シャルロットは事態を理解したのか顔を赤らめ顔は、伏したまま上目使いにこちらの様子を伺っていた。そんな行動が可愛らしいと感じ頬が赤くなるのがわかつた。カテイアさんはその光景を見てます俺達をからかうのだった。

side 蒼夜 out

5話 フランス事件～中～（後書き）

明日でフランス事件は終わると思っています

いつも読んでいただきありがとうございます。

ではまた明日更新します

「意見」「感想」「指摘等お待ちしております

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3330z/>

IS インフィニットストラatos ~蒼雷の異業騎士と再来の風・黒き雨~
2011年12月19日17時45分発行